

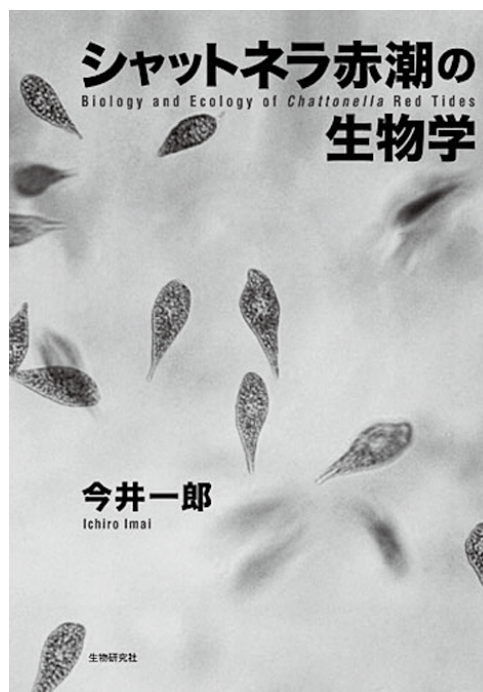
書評・新刊紹介

今井一郎 著

シャットネラ赤潮の生物学

シャットネラ赤潮は古くて新しい課題である。ラフィド藻の一種シャットネラ・マリナは1970年代に瀬戸内海で養殖産業に甚大な被害を与えた大規模な赤潮を形成し、40年後の2010年代には今度は八代海や有明海で莫大な被害を伴う赤潮を形成した。1970年代の大規模赤潮による被害をきっかけに「赤潮」を解説したいいくつかの普及書が刊行されて社会に「赤潮」の言葉が定着し、その被害軽減に向けての調査研究が開始された。まさにその渦中で著者は瀬戸内海水産研究所に職を得、以来シャットネラ赤潮研究一筋に取り組んできた。本書はその集大成で、シャットネラ・マリナの生物学に焦点を絞った10章から構成され、個別に学術論文として報告・公表された調査研究の成果を、漁業被害の軽減を目指した発生予知に焦点をあてて解説されている。その内容はシャットネラ・マリナの分類学、増殖生理・生態、生活史と休眠細胞（シスト）、赤潮発生機構とその環境、漁業被害と発生予知を含んでいる。シャットネラ赤潮の発生予知に向けて、著者の最大の貢献はその生活史の解明とシストの発見であろう。シスト発見に至る過程は「コラム」での失敗談も含め、現場での地道な調査と忍耐強い観察が重要であることを臨場感をもって読み進むことが出来る。これによって得られた成果はまさに著者の言う「センスオブワンダー」がもたらしたものなのだ。その後、著者は職場を次世代の人材養成の場である大学へと変えたが、そこでも学生と「センスオブワンダー」を共有することを実践し続けている。

1970年代のシャットネラ赤潮を契機として、西日本を中心にその後 *Karenia mikimotoi* や *Heterocapsa circularisquama* などの赤潮研究が積極的に進められ、それと機を一にして国際的にも赤潮研究に焦点が当てられた学術雑誌「Harmful Algae」が刊行されるなど、水産環境問題としてその研究が推進されてきた。日本では前述の普及書刊行の後、赤潮研究を正面切って取り上げた書籍は見あたらない。赤潮研究には本書のタイトルにシャットネラという生物名が使われているように、原因生物の遊泳細胞やシストの形態、



生物研究社
A5版, 180ページ, 2012年7月,
定価: 2,400円 + 税,
ISBN: 978-4-915342-65-3

生理・生態、増殖特性は種ごとに異なり、また赤潮形成に至る気象、海象、流れ、人為負荷の多様性は地域によって異なるなど、生物や地域の特異性が強い。

本書は科学的にはシャットネラ赤潮研究の解説であるが、その背景からは赤潮研究に限定されるのではなく、フィールドサイエンスの醍醐味や環境問題へGlocallyな対応の重要性を読み取ることが出来る。本書は赤潮研究の様々な分野の研究者にとって必読の書であるとともに、一研究者の歩みを通したフィールドサイエンスの面白さを知りうる好著である。

(長崎大学環東シナ海環境資源研究センター 松岡敷充)

<書籍を出版された会員の皆様へのお願い>

御著書の情報をお寄せください。

必要事項: ①書名, ②著者名, ③出版社, ④サイズ, ⑤頁数, ⑥出版年, ⑦定価(税込), ⑧ISBN

情報提供先: お茶の水女子大学 理学部 生物学科 嶋田 智

E-mail: shimada.satoshi@ocha.ac.jp